

松井孝典『われわれはどこへ行くのか?』

林 隆 也

東亜大学 人間科学部 人間社会学科

e-mail:takaya@toua-u.ac.jp

小学生の頃、卵が先か、ニワトリ（雌鶏）が先か、と考えたことはないだろうか。卵が先にないと、ニワトリは生まれないし、ニワトリがいないと卵を産むことができない、という悩みだ。この問題は、解けない問題として扱われることも多いが、答えは、実は簡単である。

2009年は、偶然にも、チャールズ・ダーウィン（1809～1882年）の生誕200年、『種の起源』（1859年）が出版されてから150年に当たる。この数字自体には何の意味もないが、このような区切り（と、考えがち）に、何かの記念的な行事をしたがるのが人間の社会での慣例らしい。今年になり、ダーウィンと進化論について、しばしば話題になっている。ドイツ、フランス、イギリス、米国のメディアでは、生命の「起源」と、神による天地創造との関係、政治、文化、社会等々との関係について、さらには宗教の意味そのものについて、数多く論じられている（確認しているインターネットの記事、各国のラジオ番組に限っても）。これは、「動物」と「人間」が連続していると考えられやすい日本での状況とは大きく異なっている。「人間」は、そもそも「動物」とは違うものであり、同じ次元で考えることは、まったくありえないことなのである。そのような考え方のなかで、ダーウィンの進化論が、どのように成り立つのか、なかなか難しい問題なのである。

科学が発達した現代社会でそのようなことがあるのか、と聞き返したい人も多くいるだろう。ところが、このような「違和感」こそが、日本での「人間」と「動物」との関係の見方と、たとえばキリスト教の考え方が支配的な地域での見方との、実は大きな「ずれ」であって、その点をはっ

き確認しておかないと、ヨーロッパを中心とした思想や考え方を正確に理解することは、非常に難しい。

ここで紹介する『われわれはどこへ行くのか?』は、惑星物理学を専門とする筆者が、一般向けに書いた、人間や宇宙の起源と、未来の予想についての新書である。わたしたち素人が、特別な予備知識を持たずに、このような難問を理解できるように、非常にわかりやすく説明されている。そして、科学的なものの考え方についても最後に解説している。

本書は、「われわれ」というのを「現在生きているわれわれ」とし、「現世人類」と呼んでいる（本書11頁）。「人類」にもいろいろな系統や種類があり、3万年くらい前に絶滅してしまったネアンデルタール人（ドイツのデュッセルドルフ近くに、ネアンデルの谷—ドイツ語でタール—があり、ここで発見された）などがいたが、今、生き残っているのは、現生人類一種類だということである。この「われわれ」が、一体どこから来たのか、という過去を考えるのが第1章である。いろいろな種類の人類が、700万年くらい前にアフリカに出現し、16万年くらい前に、現生人類の祖先が生まれた（15頁以下）。筆者は、「現生人類とほかの人類は、決定的に違うのでは」との疑問から問い掛けを始め、「われわれ」は「地球システム」（構成要素、構成要素間の関係性、駆動力）の中に「人間圏」をつくっており、この「地球システム」という視点から、地球を考えなければならないとしている（27頁以下）。

この「地球システム」という視点から、われわ

れ人類の将来を考察するのが第2章である。筆者は、農耕牧畜をはじめたときに「人間圏」ができたと考え（38頁）、農耕牧畜を現世人類が開始して、地球上に新しい構成要素を作り出したととらえている。これを「人間圏」という構成要素と呼んでいる。そこで、文明を、「人間圏をつくって生きる生き方」と定義し（39頁以下）、地球上の時間について述べ（47頁以下）、つまるところ、地球も人類自身の体も地球のものであり（52頁）、「レンタルの思想」で生きることを提唱する（55頁以下）。この「レンタルの思想」は、「モノとしては借りているのだけど、その機能を利用して」というものである。さらに、現在の「勝ち組」、「負け組み」というマスコミ受けする表現そのものを批判し、経済的な価値の意味について述べる（59頁以下）。そもそも「われわれ」は、どうすれば「幸せ」になれるのか？筆者は、5億年後の地球の姿を読者に示しながら、そんなに先でなくとも、21世紀半ばには行き詰るであろう「われわれ」が考えるべき内容を示すのである（66頁以下）。このような筆者の視点は、そもそも哲学の問題であって、本書の問題点の広さを示すものでもある。

第3章は、「生命」の問題である。どのように、地球上に生命が誕生したのか？生命とは何なのか（筆者の解答は68頁以下）？このような問題について、筆者は、地球上の生命について考察し（71頁以下）、生物学はまだ発展途上にあることを示している（73頁）。そこから、筆者が提唱する「アストロバイオロジー」へと展開する。これは、宇宙において、「生命とは何なのか」を考える学問であるとしている（73頁）。そこで、地球外の生命探索のために、火星、木星の衛星、土星の衛星へ飛び立ち、それぞれの環境を検討し、われわれのような、宇宙を考える知的生命体を生み出す宇宙は、特殊である、と結論づける（86頁）。そして、ついには宇宙人との交信を夢見るのである（90頁）。読者は、まるで、映画で宇宙空間を飛び交っているような解放感を、本書の紙上で味わうことができるだろう。

続いて、第4章は、「地球システム」から見た環境問題である。二酸化炭素の増加と地球温暖化の問題は、レジ袋の有料化（意味があるかどうかは議論もさまざま）に見られるように、日常的に

も身近なものであるが、二酸化炭素と地球環境の関係について、わかりやすく解説されている（96頁以下）。筆者は、地球環境も、「地球システム」の視点からでないと考察できないと指摘し、マスコミで流されている環境保護の問題点を明らかにしている（106頁以下）。これは、環境問題に関心のある人々には、非常に重要な論点であろう。そもそも、「環境汚染」とはなんであるかを知らずに、環境問題を語ることは間違いであると、筆者は指摘する（109頁）。この点も、マスコミ報道やら、環境保護やらの一面的な押し付けから、一歩退いて、環境問題を考え直すためには、絶好の材料となるだろう。環境問題は、何かとマスコミ受けすることもあって、一面的な情報に傾きがちである。一大キャンペーンを張って得意になるようなものでは、決してないはずのものが、結局は商品化されてしまい、本来の意味を見失いがちである。

以上の章を踏まえ、最後の第5章では、筆者の専門である宇宙について述べる。太陽系、地球、地球生命、銀河系、宇宙は、どのように誕生したのか？筆者は、順を追って、解説をし、現在137億年前と考えられている宇宙の誕生に行きつく（126頁）。そして、宇宙の始まりとしてのビックバン以前はどうなっていたのか？このような疑問について、わかりやすく筆者の解答が示されている。ここでその内容を紹介してしまうと、推理小説の犯人を最初に明かしてしまうようなものであるから、あえて書かないでおくが、読者の知的好奇心をわくわくさせる内容であることは間違いはない。ぜひ、実際に読まれることをお勧めする。

哲学を専門とする者であれば、一般常識や当然の「真理」を、徹底的に問い直す性癖もあるが、一般的には、科学的な真理や常識を疑うことは、なかなか難しい。そこでは、「科学的」と「客観的」ということは、ほとんど同義であろう。筆者は、「あとがき」で、科学の意味を解説し、「わかる」と「納得する」の違いを示して、「理解する」ことがどういうことであるのかを読者に提示している（140頁以下）。この点で、自然科学とはどのようなものであるかを理解するには、非常に役に立つ内容となっている。

ダーウィンの進化論も、本当に科学的であるの

かと問いなおされながらも、もっとも多く議論されている点が、やはり他の説にはない特徴（正しいか正しくないかは別として）であろう。完全には説明できないにせよ、地球上には、人間という生命体があって、何やら活動していることには間違いない。人間、宇宙、環境と、さまざまな問題を知的に楽しく考え直すには、本書は、好材料であろう。もちろん、本書の内容をそのまま、「正しい」と受け取ってしまったら、何にもならない。筆者も、そのようなことを語っているのではない。その点は、重々、気をつけておく必要がある。

本書の続編とも言えるのが、筆者と、イラストレーターの南伸坊との対談形式になっている『「科学的」って何だ!』（ちくまプリマー新書066, 2007年）である。本書の内容についての解説もあり、これもあわせて読むと、本書の内容をより深く理解することができるだろう。

ところで、冒頭の、卵とニワトリの関係であるが、このような問題を考えるのが、やはり地球上の知的生命体の不思議さであるとも言えよう。これについてもまた、ゆっくり考えてみることをお勧めしたい。

ちくまプリマー新書054（筑摩書房，2007年2月），
142頁，700円（税別）